

コラム 49:アメリカの旅 ハワイ編 (2016年1月)

「ハワイ」と聞いて浮かんでくるイメージというのは、何でしょうか。ほとんどの人は「常夏の国 ハワイ」ということで、青い海と白い砂浜、そして輝く太陽と緑の木々に咲き乱れる花、といった「地上の楽園」をイメージするのでしょうか。私の思いも、以前はそんな感じでした。。しかし、親戚や知人のいることもあって、幾度もハワイへ行く機会があり、そこで多くの日系二世の方と会い、生活に接することができました。そのなかで、私の中のハワイのイメージは少しずつ変わってきたように思いますね。

10年位前になりますが、今は亡き私の父と義父とともに、ハワイに行ったことがあります。この時、私は二人の「ハワイ観」が全く違っていることに気が付きました。義父(オトウサン)にとっては、ハワイは養父母の住んでいた場所であり、かつて若い頃に住んだ「青春の思い出の地」でもあったのです。ですから、ハワイに行くことが決まった時から、親戚や知人と会うことで頭が一杯であったようです。それに対して、私の父(オヤジ)に「ハワイの何処に一番行きたい？」と聞くと、すかさず「真珠湾じゃのう」という答えが返ってきました。戦中派のオヤジにとってのハワイは、1941年に日米開戦のきっかけとなった「真珠湾攻撃の舞台」というイメージが強烈にあったのでしょう。



10月2日 11AM ロスアンゼルスのリトルトウキョウ「ミヤコホテル」出発 11:30AM 空港に到着 予定より30分遅れて3PMすぎ(ロス時間)離陸 5時間半の飛行の後 5:30PM(ハワイ時間)ホノルル国際空港到着 7PM「パシフィックビーチ ホテル」にチェックイン。

旅行前に、たった一日しかない「ハワイの休日」をどうすごそうか、と妻と相談しました。今回は、いつも一緒だった義父母も子供たちもいないし、会う予定の親戚知人もいないので、いつもとずいぶん勝手が違うのです。幾度も来ているので、特別に行きたい場所も、やりたいこともないのです。いつも忙しい日程にふりまわされる旅をしてきたので、「時間に束縛されないで、ノンビリと過ごすのもいいよね」ということになりました。そこで私が以前から行きたかった「ビショップ博物館」を提案すると、めずらしく妻の方もスナナリと了解。「バスに乗って、ゆっくりと行ってみようか」ということになったわけですね。

10月3日 6:30AM 起床 7:40AM ホテルのそばの「Egg'n Things」にてパンケーキ朝食。アラワイ運河近辺を散策。10:30AM ホテルを出発。



前日に、現地ガイドさんに聞いていたホテル近くのバス停に行き、行先が2番と書かれたバスに乗り込む、すべては順調にいくはずでした。ところが……車内に乗り込むと妻の怒声「どうして10ドルも出したのよ!」「おまえが渡したんじゃないが!」「昨日ガイドさんが言うのを聞いてとったでしょうが!」「ワシヤ聞いとらんわい!」。要するに私がバスの料金を間違えて入れたということだけのことなんですがね。私たち夫婦がよくやる「ツマラン口げんか」なのですが、今回は場所がハワイで、しかも地元の人が大勢いるバスの中ですからね。人目もはばからず大声で、それも広島弁丸出しでやってしまったのですから、恥ずかしいことですよ。

今思うに、私達夫婦はバスの車内で＜悪い意味で＞目立っていたと思います。さらにその後で、どの停留所で降りるかを運転手に聞くために、車内の前の方に行ってウロウロ。黒人のドライバー

に「後ろに座ってろ」(と英語で言ったらしい?)と怒られる始末。見るに見かねたのか、中年の日本人女性が声をかけてくれました。「大丈夫ですよ。返ってきたチケットは、帰りの時に出せばいいんです。出した料金が倍だったので、運転手が気を利かしてくれましたよ」こちらに長期滞在でもしている人でしょうか。さらにこう付け加えました。「後 20 分位で着きますから、降りる所を言うようにドライバーに言っておきますね」有難かったですね。「地獄で仏」とはこういうことです。上品な顔立ちの奥様風の方でしたが、今思うに、「親切」で話しかけたというより、ワケノワカラナイ日本人夫婦の「醜態」を見るに見かねて、やんわりと「注意」されたのでしょう。

それからしばらく、私達はおとなしく前の座席に座っていました。改めて乗客を見ると、このバスに乗り込んでくるのは、お年寄りと身障者ばかりという感じです。ふと気が付くと、今座っている席は「身障者用シート」と書いてあるではないですか。あわてて立ち上がります。すると同じ席の隣に座っていた年配の女性が言うのです。「座っていても大丈夫ですよ。人が来たらゆずればいいんですよ」杖を手を持っているのは、歩行が不自由なのでしょう。彼女はさらに昔話を始めました。



「私は朝鮮人だけどね。昔は東京にいたんですよ。日本語が話せると、ハワイでホテルの仕事があると聞いて、こっちに来たのよ」向かいの席の白人男性から声がかかりました。「I lived in Japan too」(オレも日本にいたんだ)思わず聞きいてみました。「Really! Where in Japan?」(へえー！日本の何処?)「Osaka!」(大阪だよ!)身障者でしょうか、巨漢の彼は大きなスチールの杖を側においています。そして大声で、理解不能の<日本語らしき言葉>をいくつも話すのです。なぜか、それから見知らぬ者同士、偶然に乗り合わせたバスの車内で、「奇妙な会話」が始まりました。<あれは何だったんだろう>と今にして思います。知らない同志なのに、出会ったばかりなのに、ほんのひと時、なぜか妙に「楽しい雰囲気」。この感じは前にもありましたよ。そう、ロスでの初日の夜、6人そろっての夕食の時と同じ「いつまでも話したい」感じなのです。妻がポツリと呟きました。「旅って楽しいね」

その時、同じ身障者シートに座っていた「お年の女性」が立ち上がりました。歩行用のカートを押して、降り口に向かう彼女の足はふらついていました。私はとっさに立ち上がり、カートを降り口まで誘導し、さきにバスの外に出て、カートを下に下ろしました。何の躊躇もなく、ごく自然にやったのです。その時の車内で起こった「友好ムード」がそうさせたのでしょうか。「私はここで降りるけど、博物館はあと三つ目だからね」そう言って、<朝鮮人のオバサン>は先に降りてゆきました。次に私たちが降りると、バスの中で<巨漢>が手を振って何か言ってます。「Nice trip!」(いい旅を!)そんな感じだったのでしょね。



BISHOP MUSEUM ビショップ博物館

ハワイ最大の博物館で、設立は 1889 年(明治 22 年)という大変に旧く、格式高い博物館です。

広々とした庭園にテーマごとに瀟洒(しょうしゃ)な建物が設営され、私が思っていた以上の展示内容でしたね。ハワイとポリネシアンをテーマとしていますので、昔の住居や船、そして道具や衣装や工芸品などが、豊富に展示されています。じっくりと見て廻ると一日かかる、という感じですね。圧巻は、本館ハワイアンホール、吹き抜け三階建ての天井から吊るされた、巨大なクジラの復元骨格。まじかで見るとかなりの迫力です。時間帯を選べば、館内の日本語ガイドもありますし、日本語解説のプラネタリウムを見ることも出来ます。星空を見上げながら、ポリネシアンたちが星を頼りに小舟をこいで、島から島へ大航海をしていた時代に思いを馳せてみるのもいいものですよ。

ハワイの歴史を紹介してあるコーナーでは、歴代のハワイ王朝の大王の写真がありましたが、なぜか皆、実に寂しそうな表情なのですね。調べてみますと、初代 1795 年(寛政 7 年)のカメハメハ大王から、最後の 8 代目リウオカラニ王妃が亡くなる 1917 年(大正 6 年)まで、わずか 122 年。歴代の王は、いずれも短命であったようです。ポリネシアン人全体の人口も、初期には 30 万人いたのが、現在はハワイアン人の純血の人は約 1 万人と言われているらしいですから、急激な人口減少が起きているのです。この原因は「移民」たちの持ち込んだ病原菌に対して、彼らは免疫力がなかったからだと言われています。



ハワイの日系移民の歴史について語る時に、「キイパースン」としてかわってくるのが 7 代目のカラカウワ王です。1881 年(明治 14 年)に来日し、驚いたことに、天皇家にハワイ王家との「血族結婚」の申し込みをしているのです。さすがに結婚話は成立しなかったのですが、その時に同時に「日本人移民」の要請をしており、それから 4 年後の 1885 年(明治 18 年)からハワイへの「出稼ぎ移民」が始まっているのです。私達とハワイとのかかわりの原点がここにあるというわけです。それにしても、この途方もない「縁談話」が成立していたら、その後の歴史はどうなっていましたかねえ。「ハワイ県」などというものができたり、真珠湾には日本の連合艦隊の基地があつたして……全く違った歴史の流れになったかもしれませんね。

カラカウワ王は 1891 年(明治 24 年)に病死。そのあとに王位に就いたのが、彼の妹であったリウオカラニで、ハワイ王朝の最後の王妃となります。彼女の時代には白人勢力の支配はさらに進行し、王制廃止によりハワイ王朝は幕を閉じます。そして彼女は王位奪還のため反乱を計画し、捕えられて獄中生活をおくることになるのですよ。「悲劇の王妃」と呼ばれる所以ですね。館内に飾ってある写真を見ても、実に寂しそうな表情です。そして、カラカウワ王の来日から 17 年後の 1898 年(明治 31 年)、ハワイは併合されてアメリカの領土になるのです。彼はアメリカへの経済的依存が強くなってゆく中で、「白人支配」に抵抗し、「有色民族」の連盟を提案してたのです。それが「結婚」と「移民」の話の意味だったのですが、当時の明治政府が「彼の気持ち」をどこまで理解していたか、かなり疑問ですね。



純粹のハワイアン、ポリネシアンの人たちは、民俗的体質というんでしょうか、みんな大きくて太っていますね。要するに小錦や曙のような「相撲取り体型」の大男たちが、そこら中にいるという感じで、小さくて痩せたポリネシアンなんて見たことないですね。そして、みんな「優しい目」をしているんですよ。ビショップ・ミュージアムに入ってきた時、出迎えてくれた案内の男性がいました。大きな体で、立派なヒゲ、やっぱり優しい目をしているのですよ。まさに本物のポリネシアン体型です。

写真を頼むと、快く承諾してくれました。しかし、あとで再生してチェックすると、何か物足りないのですね。＜そうか比較するモノが必要なんだ＞というわけで、帰り際に再度お願いをしました。「May I take your picture again?」(もう一度写真を撮らせてくれる?)そして付け加えました「With my wife!」(妻と一緒にね!)彼はにっこりとして「Sure!」(いいとも!)と言。カメラを構え、＜オイオイ、そんなに引っ付かなくていいよ＞と思いつつパチリ。そして彼に向ってお礼の決めゼリフ。「You look very nice!」(アンタ、カッコイイよ!)彼は満面の笑みで答えてくれました。

ビショップ博物館の帰りのバス停、私達といっしょに三人の老人が座っていました。日系人ではなく、顔から推測すると、フィリピンかアフリカ系ですかね。色の黒い老婆は、何かずっと一人で呟いていました。人通りも少なく、まるで日本の田舎町にきたように静かです。ホノルルの中心部からバスで40分の所。これもまたハワイの風景なのですね。バスに乗ると、座席の上にこんなことが書いてありました。After you die, You will meet God.(死んだら、神様に会えるよ)

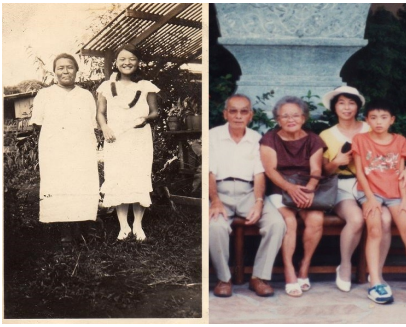


私が初めてハワイに行ったのは1991年で、今から25年前、日系移民が始まった年から数えると106年を経ていることになります。私にとって初めての海外旅行で、当時は私が42歳、子供たちもまだ幼かったですね。義父と義母と私達家族を入れて、6人でこの地を訪れていました。その後もコチラにくるといつも必ず、義父(オトウサン)の親戚だという日系二世のお年寄りが来られて、食事をしたり、何処かへ連れて行ってくれたり、ということがあったものです。どういうツナガリの親戚なのかは全くわかりませんでしたが、大抵は会社の経営や農場などの「成功者」が多かったようです。



太平洋戦争中のハワイにおいては、ロスでの強制収容所のような大規模な迫害はなかったようです。その理由は極めて明白で、日系人の数が、当時のハワイの人口の半分に達するほど多かった、ということのようです。要するに、住民の半分を収容所に入れる施設もないし、街が機能しなくなるということでしょうね。ただし、ロスの場合と同様に、徴兵志願による国家への忠誠は求められたのです。米国本土とハワイ出身の二世で組織された442部隊は、ヨーロッパ戦線において、アメリカ陸軍史上に比類なき功績を残した、と記録されています。ハワイの移民の一世は大変な苦勞をしてアメリカ市民となる基礎を築き、二世はそれを引き継いで必死に頑張ることで、アメリカ社会に認められる階層になり、三世は高等教育を受けることで、政治家や医師や弁護士という形で社会進出を果たしているようです。年齢的には二世が私達の親と同じくらいで、三世というのが、戦後まもなく生まれた私くらいの年齢になるようです。

初めてのハワイの旅の時には、妻の叔母夫婦に大変に世話になりましたね。ハワイ島のヒロにある自宅に泊まり、車であちこちに行き、地元の人の食事をごちそうになりました。ハワイ島ヒロ市の反対側にあるコナの街へ、砂漠の中を延々と3時間のドライブ、叔母さんは年に似合わぬスピードで飛ばしつつ、助手席の私に向かってシャベリッパなし。実にパワフルです。「夜になってもオトウサン帰って来んで。サトウキビの中で酔っ払って寝てしもうて。何べんもワタシが探しに行ったもんよ」広島弁なまりの＜昔話＞は止めどなく続きます。



オバサンは養女でしたので、オトウサンのように十分な教育を受けさせてもらえなかったこともあり、いろいろとツライことや、言いたいことが沢山あったようです。「今では私も強うなって、大きな黒人とケンカしても負けんようになったわいね」昔の写真を見ても、気丈で明るい性格の娘であったことが覗えます。血のつながらない兄妹ということで、一時仲たがいの状態もあったようです。今は和解して、私達家族を快く受け入れてくれたのは嬉しかったですね。

叔母さんも戦前から戦中にかけては、随分と苦労があったようですが、日系三世である子供さんたちは医師や教師となっています。しかし、叔母さんを含め、沢山の親戚や知人の子供の人たち、すなわち日系三世の人たちとの付き合いは全くありませんでしたね。彼らは自分のルーツである日本や日本人に対して、必ずしも好意を持っていないし、興味もないように、私には思えました。米国に生まれ、米国で育った彼らは、アメリカ市民としての意識が強く、日本とのつながりを、あまり求めていないようです。

それゆえ、義父が4年前に95歳で亡くなり、叔母さんなどのお世話になった日系二世のお年寄りの方たちが亡くなられた今となっては、ハワイに住む人たちとのつながりは途絶えてしまいました。寂しいことですが、ロスのケースのように、三世の人との付き合いが続いているというのは、むしろ稀なのかもしれません。しかしこれも、次の4世の代にまで引き継がれるかという、難しいかなと思いますね。私の息子たちと、向こうの4世の人たちの双方の気持ち次第でしょうが……

1917年(大正6年)、「西洋人支配」に抵抗し、宮殿に幽閉されていたハワイ王朝最後の王妃「リリウオカラニ」は、失意のうちにこの世を去ります。彼女は曲を譜面にできる、唯一のハワイ人作曲家として150曲以上の歌を残していますが、そのうちの 하나가、あの誰もが知っているハワイアン音楽の代表曲「アロハオエ」なのです。これは恋人同士の別れを歌いながらも、滅び行くハワイ王朝への惜別と、侵略されてゆくポリネシアン文化への悲しみが込められているように思えます。「アロハオエ」の日本語の歌でなく、原詩の訳を紹介して今回のコラムを終えることにしましょう。

山を横切る雲が	美しい雨を降らせている
さよならあなた	さよならいとしい人
木陰にたたずむ	素敵なあなたを抱きしめたい
わたしが去る前に	また会える時まで



(25年前、初めてハワイに来て、あちこちの観光に興奮ぎみの私達に向かって、叔母さんがつぶやきました)

「ハワイまで来て、コガイな所に来んでも、日本にナンボでもエエ所があるでしうが」

